

『美香様とタロウ』

・女王様 おねショタ ・美香 タロウ ・指アナル 尻ビンタ

午前の爽やかな陽が、窓から室内に射している。
その光は、ベッドに横たわる裸のタロウにも優しく当たる。

栗色の柔らかな毛と、スベスベした肌。
気は弱い、女子の様な美しい少年メイドだ。

桜色の唇と、肌色からほんの少し変色した陰部。
小さな包茎オチンポは、ちよこんと丸まっている。

少年メイド達は、陰毛の生えない年頃の見た目だが、多くはこの洋館で性交渉する事になる。
しかし、タロウは館の主である一族から、童貞指定されているのであった。

*

タロウは眠っている訳では無い。
その目は、ベッドの脇へやって来た美香を見る。

全裸のタロウに対し、美香は濃紺のメイド服だ。
ぴっちり体に張り付いたノースリーブに、白いエリと真紅のリボン。

館のメイド服の素材は、まるでゴムの様に乳に張り付き、乳首を浮き立たせている。

腕には薄いストッキング素材のロンググローブ。

パンツの見えそうなタイトミニからは、黒いパンストの足が伸びている。

髪は、サイドが顎の下位までの長さのボブカットで、一部に跳ねがある。
その頭に、小さな白いカチューシャが乗っている。

美しいが、一目で攻撃的な性格を匂わす顔つきであった。
冷笑的な表情を浮かべそうである。

実際に、ナイフを使って洋館の賊を抹殺する事も厭わない。

美女とも美少女とも思える、年齢不詳な女性だ。

*

少し不安気な表情のタロウを見下ろす。

美香というメイドの、常に鋭い目付きは少年メイド達の恐怖の的である。

その視線は顔を見た後、皮の被った短小包茎へ向かった。
「ふん。さあ、四つん這いになりな」
命令する。

タロウの心配事とはコレであろう。
とは言え、恐怖心は感じていない。

これは週に一度位やってくる慣習だ。
この不思議な時空間の館では、週だの月だのという感覚も、曖昧なものであるのだが……。

後ろに回りこんだ美香に、丸出しの肛門が観察されている。
美香は近くにあった容器から、自分の右手の指にローションを付けた。

それをタロウの尻の窄みにも塗りつける。

ぬるい温度は伝わってきた。

「あ……」

思わず声を漏らすタロウの尻を、美香がピシヤリと叩いた。

「何、感じてんの、お前」

「も、申し訳、ございませんっ、美香さまあ……」

「ふん。チビッコどもの管理もメイドの仕事だからね。だから、お前の恥知らずなお股をイイコイコしてやってるんだよ」

館の数十人居るメイド達の序列で、最上位に近いのが美香であり、最下位なのがタロウである。

二人は同室であり、美香はタロウの教育係である。

「は、はい……感謝してますっ」

イイコイコは普通、撫でる行為の事だが……。

美香はまたピシヤリとシヨタ尻を叩いた。

「あんっ、痛っ」

「まったく……、ふふふ」

尻たぶが赤くなる。

美香は割れ目の間に、また指を這わす。

穴への集中線へ、ローションを塗りこむ様に濡らす。

「ん、ん、んんう～～」

タロウは顔を赤くして、羞恥に耐える。

美香は、肛門の中へズブリと指を突っ込む。

「あ、ああっ～～っ！」

「オスのお仕置き用の穴イジられて、キモチ悪い声出すんじゃないよ、タロウ。一人前の変態みたいにヨガっちゃって」

「うっ、うう、ごめんなさい……」

無毛な少年メイドといえど、館の調教生活でアナルの性感は開発されてしまっている。

グリグリと肛門をホジられては、どうしても快感を感じてしまう。

美香は、ヌブプリと少年の中までローションを塗り込む。

「あんっ、んんんっ！……」

もう駄目だった。ムクムクと立ち上がるペニス。

硬くなって、伸び上がる肉筒。

だが、皮は被ったままで、大きさも大した事は無いのであった。

タロウは永遠の短小包茎なのだろう。

タロウは館に来た頃、オナニーすら知らなかった。

そして今も、館のルールによって自慰は禁止である。

そんな美少年が、肛門をイジられて興奮するようになってしまったのだ。

美香は手に付いたローションを拭く様に、ぶら下がった小ペニスに液をなすり付けて、にゅっぽりと一回だけシゴいた。

タロウは、その一回のシゴきにも反応してしまう。

「んっ！」

美香はポケットから、赤いリボンを出した。

それをペニスの根元に軽く結びつける。

「サトリお嬢様から頂いたリボンに、感謝しないと。分かってるわね？」

「は、はい……」

これを付けていると、魔術的な効果で射精は出来ない。

リボンの結ばれたペニスは、何かのプレゼントの様だ。

館へ来てから、どれ位の月日が経ったのか。

奇妙な時空感覚の中、永遠の童貞新人メイドである。

メイド達は、サトリ様達の一族に選ばれ、この無限の時空間の住人となった。

主への畏敬は深く、忠誠は絶対である。

数十人の、大家族の様な関係であった。

つづく

・女王様 おねショタ ・美香 タロウ ・指アナル

*

「ほうら、タロウ。お前の少年おまんこ……、具合みてあげる」

美香は、濡れた肛門にまた指を挿入して来た。

快感の源泉に、ニユルリと女の指が差し込まれる。

「んっ！ ふああっ！！」

ニチャツ、ニチャツ！

媚薬効果もあるローションの音を立てて、指を出し入れされる。

中で指を曲げて搔かれ、悶絶する。

「ふああっ、あはあっ！」

「こら、タロウ。サトリお嬢様への感謝はどうしたの？ お前があっちこちで精液ぶちまけても、お屋敷へ置いて頂いている、お優しいお嬢様でしょう？」

「あーっ、あっ、あーっ、さ、サトリ様あ、大好きっ、かんしゃっ、感謝してますう〜っ！」

タロウはもう既に射精を我慢出来なかったが、リボンの効力で発射出来ないのだ。

窄まった皮チンポの先端で、こみ上げてくる精液が堰き止められている様な感覚。

しかし、金玉はどんどんと新鮮な精液を送り出して来る。

ムズムズとした童貞チンポは固くなり、ビクンビクンと暴れる。

こうなると少年メイド達は皆、悶絶するしかなくなる。

「あーっ、あっ、あーっ！ 出ちゃうっ、出るう！」

「何言ってるの、タロウ。勝手にお漏らししちゃ駄目だから、リボンつけてあげたんでしょ」

「うっ、うう、でもお〜、あん、あんっ！」

「お子様チンチンだからって、ワガママ言うんじゃないよ」

指の出し入れは、どんどんと加速していく。

ニチャツ、ニチャツ！ ニチャツ、ニチャツ！

ペニスはカウパーを垂らしながら、ビクンビクン跳ね、振り子状態だ。

「タロウ、私の事はどうなの？」

「み、美香様も、だ、大好きいっ！」

「ふん」

美香は赤いリボンに手をかけ、解いた。

ぶちゅっ、ぶちゅっ、ちゅるるっ！ ぶびっ！

勢い良く、白い液が飛び出して、シーツに溜まりを作った。

「はあっ、はあっ、ああっ！」

その間も、美香は出し入れを止めなかった。

ちっこいチンポの裏側で、刺激を送り続けて来る。

「あら、もう臭っさいスケベ汁出したわね、タロウ」

「はふっ、はふう、ご、ごめんなさい、美香様……サトリ様あ」

「女だらけの館なんだから、ちんぽ下僕どもが射精しちや駄目でしょ」

「は、はい、駄目っですう、うっ、うっ、あっ出るう～～っ！」

数回発射できる量が溜まってしまったのか、少し間を置くと、またビューーっと勢い良く液が飛び出る。射精しながら、お説教である。

「頭で考えてなくても、チンポで考えてんでしょ、お前達チンポ動物は」

「あっ、あんっ！」

美香は、容赦なく少年アナルに指を抜き差しし続ける。

くっちゅ、くっちゅ、くっちゅ。

指レイプといっても良い勢いである。

「ああっ、また出るう、美香様っ、また出ますうっ、出ちやいますう～～っ！！」

「あん？ 何だって、聞こえないわよ。ちびっこのクセに変態射精ばっかりしちやって、ちゃんとお話出来ないの？ お前は」

「うっ、ううっ！！」

ぶびゅるるっ、びちゃあっ！！

タロウはこうして、何発も射精してしまう。

ぶちゅっ、ぶちゅっ、とその都度惨めな音を立てて、シーツの液溜まりに発射される青臭いシヨタ汁。

「あら、お前。こんなに精液溜めて。お姉ちゃん、気づいてあげなくてごめんなさい、ふふふ……ノノノ」

「うっ、うっ、うっ！」

タロウは顔を赤くして、羞恥を感じる。

オナニーも知らなかった少年。

ペニスを女性に見られる事など、最も恥ずかしいという年頃だった。

この感覚は、館では永遠に消える事は無いのだ。

*

同室の教育係でもある美香は、ただでさえ普段から、見せ付ける様に着替えたり、脱いだパンツを渡したりする。自慰行為禁止の館で、純朴なタロウでも精液は溜まる一方なのである。

もう、意識が遠のきつつあるタロウ。

「オナニーも知らなかったくせに、メイドのパンストやパンツ嗅ぐだけで、前を濡らす様になっちゃって。少年メイドのチンポ教育って難しいわあ」

わざと黒パンストの脚を見せつけたり、パンツを被らせ匂いを嗅がせて調教しているのだ。

他にも、館には沢山の個性的なメイドがおり、事あるごとに少年メイドは性的な挑発やお仕置きを受ける。まったく白々しいのだが、純粋なタロウは永遠に、勃起に自罰感情を持つ事だろう。

「さ、今日はこれぐらい出せば良いかしら。オスのきったない金玉の事なんて、私が詳しく知るわけ無いからねえ、ははは」

美香が穴の内部で最後のひと掻きをすると、皮ペニスの先からじゅびゅうっと大量の液が飛び出した。

殆ど、白目を剥いた様になっているタロウ。
震えながら、なんとか四つんばいを維持している。

「あ……、あ……」

美香は、飾り程度の小さな腰巻エプロンを外す。

高貴なお屋敷の制服らしく、ガサガサとした布では無く、滑らかな感触だ。
それで、タロウのペニスをもみくちゃに拭いた。

「ん、ん、あああ～～～……」
ヨダレを垂らし、後始末をしてもらおうタロウ。

美香は雑にチンポを拭き終わると、ぱちんと尻を叩いた。

タロウは倒れこむ。
美香は精液で汚れたエプロンを、タロウの顔にぐちゃぐちゃと押し付ける。

「ほら。後で、このエプロンと、シーツとおちんちんを洗っておきなさい」
「ふ、ふあい……。うう、み、美香様……」
「ん？」

タロウは何とか上体を起こした。
意識は快感を通り越した宇宙の果てに行き、まだ帰還していない様ではあるが。

「ああ……」
軽く口を開ける。

その美少女の様な、桜色の唇の割れ目から舌が見える。
美香は自分の口を近づけ、舌先を出すと、レロレロとタロウの舌を舐めた。

声にならない声を出すタロウ。
館の使用人には家族的な一体感があり、少年メイド達は皆、どのメイドも姉の様に慕う。

タロウは特に、同室の教育係である美香に対しての想いがあるのだった。
最初は陵辱に思えたものすら、今はご褒美とも感じる。

美香が口を離す。
「さ、廊下の窓を拭いて、後は自由時間に……」

タロウは倒れこんでしまった。
少し気絶した様になっている。

「ふむ……。まったく……」
美香は汚れたエプロンを拾うと、それを持って部屋を出て行った。

タロウが一人前の少年メイドになるには、まだまだである。